

正宗白鳥

橫光利一論

橫
光
利
一
論

『寝園^{しんえん}』を通読した。それから、新年号の『改造』所載の『受難者』と、『中央公論』所載の『春』とを読んだ。いずれも熟読した。どれも一度読んだだけでは印象不鮮明なので、二度読み返したのである。私は、横光氏の小説は、これまで文芸月評をやる時に、幾つか読んでいるはずだが、顧みると印象が甚だ乏しい。氏は創作にのみ全心を注いでいる人らしく、他の作家のように時々評論とか感想とかを書いて、鬱憤^{うつぶん}晴らしをしたり、生活

費の足しにしたりすることのないその点甚だ珍しい人のように思われるが、とにかく、私は氏の小説以外の文章は一度も読んだことがない。面識はあるが、さしたる話をした覚えはない。それ故、この横光利一論は、三篇を基礎として作り上げられたもので、私自身少し危かしく感ぜられている。完全に一人の作家を論評するには、その全集を読まなければならぬので、私は、これまでに論評した明治の作家についても、読み残した作品を後で読んで、新たな発見をしたことも少くない。横光氏の如く将来に富んだ作家についてはなおさらそうであ

る。だが、他日の是正を予期しながらも、二、三の作品を通して或る作家を討究することも、自己の頭脳の練磨のために、私に取って必ずしも無用ではないのである。

外国文学の鑑賞は甚だ困難であるが、それでも、定評ある名作を読むと、心が打たれるのである。老いては青春の書は理解されないであろうと思われるのに、私は、この頃、ある必要から『即興詩人』を手にしてところどころ見ているうち、興味に駆られて、首尾を通じて読了した。これでこの小説を少なくとも二回は通読した訳だが、青年時代にはじめて読んだ時よりも、かえって深く身に

染みて感ぜられた。恋愛と芸術と宗教とを融和した夢物語であって、現在の私の心境とは遠ざかっている世界であるのに、私は読んでいるうちは、この青春の夢に浸るようになった。西洋物でも最近の文学は、私にはややこしくて読みづらくて、何のことやら分りにくくて、そういうものに接するたびに、私の頭の古さが歎ぜられるのであるが、それでも、例の『ユリシーズ』の最終篇の第十五挿話を、岩波版の翻訳で今読みかけると、すばらしく面白そうなので、はじめから読み直そうかと企てている。横光氏も、日本現代の最新傾向を心に宿している作

家であるらしく、従って西洋の作品についても、二十年前の日本の青年作家が、イブセンだのモウパッサンだのを憧憬していたのとは趣を異にして、英仏あたりの最新作文学を自分の創作の肥料としているように思われる。

『寢園』のなかには、作中の人物に仏語でコクトオの詩を学ばせているし、『春』のなかには、作中人物をして『ユリシーズ』のある描写を思い出させている。徳川時代の漢詩人は、唐詩を模倣し、唐詩の模倣を模倣し、次いで宋詩の模倣に転じ、森槐南かいなん父子によって清朝の詩風を移植するに至ったそうであるが、明治の西洋文学追隨

は、交通便利の現代であるから、急速に進んで、今は西洋と時の隔てなく、歩調を合わせるようになったといつていい。そういつても、私は横光氏の小説が、西洋のどの作家の感化を受けているというのではない。受けているかないか、東西文学比較は私のなし得るところでないが、多分誰れの感化も受けてはいないのである。元来明治以来の西洋文学の影響なんて、極めて皮相なもので、徳川時代の漢詩の支那模倣程度にも達してはいないのである。模倣したつもりでも、本当は模倣でなくって、日本の作家の個性を出しているとすると、かえって結構な

訳である。横光氏の小説には、外形的にも内面的にも、私が親しんでいた明治の小説とは異っている趣がありそうなのだが、それが私の心に摂取すべくどれほどの価があるのかと、私は目を尖らせて氏の作品を読んだ。

『改造』や『中央公論』の新年号に同時に掲載されているくらいだから、世上の小説好きの読者に喜ばれているのであろうが、私に取っては氏の小説は、いわゆる「小説的興味」をもって気軽に読まれる種類のものではない。

『春』はすらすらと読めたが、数ヶ月前の雑誌で『母』を読んだ時にも、今度『寢園』なんかを読んだ時も、私

の心は重苦しかった。私は、数十年来いろいろな小説を
読み馴れているが、食物と同様で、先天的に自分の舌に
適しないものも多いのである。だが、私は興味ばかりで
小説を読んでいるのではない。心の糧として文学に対し
ていることもある。難解な文学その他の書を努力して読
んで、そこに潜んでいる人生の真味を知り得たら、最も
愉快なことだと思っている。

二葉亭の『浮雲』において、日本の小説でもはじめて
心理描写が丹念に試みられ、今から見ると、それが平凡
であるとともに正鵠せいこくを得ているように思われるが、漱石

とか龍之介とかの小説には、その心理解剖も、なかなか捻ひねったものとなり、凝ったものとなった。微妙な心理の動きを擱んでいるよりも、知識の遊戯に過ぎない感じのするものも少なくなかった。昔は性格描写の必要がよく唱えられたことがあったが、それは大抵は大まかなものであった。

横光氏は、好んで人間心理の交錯に注意しそれを解きほぐして事態を明晰にしようとしている。『母』なんかは、当代の小説のうちでも手の込んだ心理研究であったが、私は数ヶ月前にあれを読んだ時に、人間の真相が観

察されているのに感心するよりも、何となく煩わしく思
った。どうして私の心に感銘するところが稀薄なのであ
ろうかと疑われた。『春』は、『母』よりも『受難者』
よりも、作者が軽い気持で書いているのであるが、かえ
って私には豊かに感銘された。芸術の肌面きめもこまかい。
そして、『春』や『母』や『受難者』の筆法が一層調ととの
って、融和されて、最もよく作者の持前の小説味を備え
ているようなのが、『寝園』である。この小説は、この
作者の長篇であるばかりではない。質においても、作者
この頃の代表作であるにちがいない。

『寝園』は、一つのサロン小説だといってもいい。日本には有閑婦人連のそういう社交会はまだ出現していないようだが、西洋風俗の追随がそこまで進んで行ったら、婦人達が夜会とかお茶の会とかに集った時に、好んでぺちやぺちやと噂にするであろう種類の人事がここに取りあつかわれている。題材ばかりではない、作者の書きつ振りがこの種類の小説の見本に相応ふさわしいのである。婦人雑誌なんかの通俗小説には、有閑婦人の情事が語られているのである。『寝園』と筋立てを同じゅうしたようなものがあるのである。そこには、いわゆ

る書生芝居以来の「新派劇」と、自由劇場以来の新劇との相違がある如き相違があるのじやないかと思われる。そして、『寢園』には、別段新時代の男女を書こうと企てているらしくはないのに、場面が新しい空気を漂わせている。目醒めた女を書こうとか、暴露的にブルジョアの女の裏面を書いてやろうとかいうような、世俗的な勇猛心を発揮した種類の小説とは異つていながら、また、『寢園』という題目が支那趣味を現し、延寿太夫の「十六夜」讚美が江戸趣味をほのめかしているに關らず、私は、そこに西洋風のサロン趣味の匂いを感じるのであ

る。曾我^{そが}迺^の家^やの芝居を面白がって見たり、帝国ホテルのクリスマスという外国の祭りに列席するのを特殊の楽しみにするような現代では、まだ婦人の社交会が、『寝園』を話題にし、こういう小説と歩調を合せはしないだろうが、日本も国運が隆盛になったなら、こういうサロン小説が続出し、従ってもっと巧妙なものが続出するようになるのだ。平安朝時代の『源氏物語』その他の多数の物語も、あの時代らしいサロン小説であった。

『寝園』には、「高が^な奈^な江^えを、奈^な江^えが^か梶^じを、藍^{あい}子^こが高をとめぐっている霧の中」という文句がはじめの方

に出ているように、軽井沢の霧の中を、大学院の経済学
生だの、現在の夫に満足しない有産階級の中年女だの、
破産状態に陥りかけている独身の中年男だの、フランス
語の稽古なんかやっている結婚前の女だのが、臃ろげな
姿を現して、互いに追いつ追われつ、呼びつ呼ばれつし
ている様を写して、全篇の序曲とし、次第に霧が霽^はれて
クツキリと皆んなの姿が浮ぶように、人さまさまの行動
と心理の描写の筆を進め、天城山の猪狩を一篇の焦点と
し、趣向の立て方が忠臣蔵の五段目と、同工異曲といっ
たように、中年女をして猪とあやまって夫を打たせてい

る。そして、忠臣蔵では、勘平の心理の動揺がただ表面的に解釈されているに反し、ここでは、中年女が夫を打ったのは、猪の突撃から夫を救おうとしたためばかりではなく、彼女の潜在意識に、夫の死を願っていたのが、意外な事件につれて突発的に現れたのではないかと、その点を一篇の心理研究の焦点としている。この事件の余波が波紋を描き描きしているうちに、窮極の収まりがつかくことになった。潜在意識が表に現れ形を取ったといつていい。

首尾を通じて全篇の組立てが用意周到であって、作者

が筆を採る前に如何に頭脳を勞したかが私には察せられる。私は横光氏について個人的に何の知るところもないから、見当ちがいをしているかも知れないが、『寢園』一篇によつて判断すると、この作者は案外明晰な頭脳の所有者であるらしい。漱石の小説なんかは明治の作品のうちでは筋の運びが行き届いていて、理詰めで押し行っているところも多いが、だが、漱石は、あふるるばかりの詩才を、即興的に発作的にぶちまけているので、全体の釣り合いなんかは無視されている。横光氏のは形がよく調っている。四、五人の人物を相当に書き分けてい

る。感傷的な女を取り扱いながら、婦人読者を喜ばせるような抒情趣味の濫費をしていない。自己の芸術に忠実であるといつていい。……それに関らず、私はこの小説を、さほどの興味をもって読み通せなかつたのみならず、読後の印象も稀薄であつたのだが、それはどういふ訳なのであろうか。私は自己の小説鑑賞力を反省した。私は辛い小説に感心するばかりではない。『即興詩人』風の甘味たっぷりの小説にも舌鼓を打つのである。それで、甘味の多かるべき『寢園』に甘味が欠乏しているために物足らないのであろうか。多くを説かずして、簡にして

要を得させようとする書き振りが私に理解されないの
あろうか。一篇の中心人物たる奈奈江の気持は私にも作
者とともに辿って行けないことはない。猪の代りに打た
れて、生死のほどの危ぶまれた夫が次第に回復しそうに
なるのを見ると、重荷をおろしたような喜びを感じると
ともに、ふと、彼女の頭に、夫がまだ傷つかぬ前の、日々
の二人のどうしようもない物憂げな長い生活の姿がちら
りと浮んで、「ああ、またあれか」と思つて憂鬱になる
あたり、また終りに近づいた所の、「彼女が火の消えか
かっている火鉢の縁で手をあぶりながら、肉の落ちて光

沢の消えた指さきを見ていると、若い義妹の藍子のつやつやした爪や頬の血色が浮んで来て、ああ、とうていこれはあの藍子の敵ではないと、急に火鉢の縁から手をひっ込めずにはいられなかった」あたりの気持、おのれを頼んでいた女が自己不信に陥り、やきもきするあたり、そういう気持に押され押されて、ついに夫を棄てて意中の男を追って行く径路は、私にもよく同感される。延寿の美音で「朧夜に、星の影さえ二つ三つ」と、唄いだされるのを聞くと、ぞくぞくと手首から腕を伝って鳥肌になって、「これはいよいよ危い、逃げよう」と思った

梶という男が、女を逃げたり避けたりしながら、一方でいやに女に拘こたわっている気持は、私にもどうにか受け入れられないこともない。結婚前で、まだ男をよく知らない藍子が、周囲のどの男をも好きになって、「特に一人と結婚するなどということは、誰も彼もと一緒に結婚することと同様」なように思われて、「みんな、あたしと、いつときにどつと結婚してくれないものかしら」と思うあたりから、義姉の行為に接触するにつれて、知能と情緒が啓発する径路は、私にも分らないことはない。人のいい夫である仁羽には、作者はむしろ好意を持っている

らしく、妻に逃げられたのも知らないで、トラップの連中と競技に耽り、「仁羽は銃の音を聞きつけるがいなや、もう今までときどき顔面をかすめていた不安な影は全くなくなつて、眼を細めながらも、うっとり空の一方を見上げたままにこやかに笑っていた」と、一篇の結末を、仁羽の晴々した表情に求めた作者の心遣りに、私は同意しないでもない。ここに引用した二、三の詞句によつても一端が窺われる如く、この作者は、人間の言行と周囲の事物とを相連関させている。軽井沢の霧の中の暗中摸索の恋愛心境、猪狩りの場の激動的心理は無論のこと、

「肉体の衰えを歎ずる時の火の消えかかった火鉢」 「清元の音曲を後に聞かせながら、服装など江戸風に凝った下町趣味の中年の男女の立話」 「天城の大事件を思出させる銃の音を聞きながら、銃の音の深刻な意味には、少女の藍子ほどにも気づかず、顔面の晴れ晴れと、うっとりして微笑することによって一人物の性格を示す象徴的表現」 その他、随所にこの作者の志している表現法描写の態度が見られるのである。

私にはこの作者の狙いどころは大抵解ったような気がしだした。技巧のうまい作家だと思う。……そう思うに

関らず、私は『寢園』に魅惑されなかつた。これほどよく書いてあるに関らず、人生の現実感が切実に私の胸に迫って来なかつた。うまく作られたる小説とのみ思われ
る。簡潔なのが、底の深い人生を暗示しているのではな
くって、これつきりと思われる感じがする。前にも引用
したように、人間の恋愛心理なんかを洞破しているところ
が少なくなないのだが、それらはただそうはっらっいうものを並
べていると思われて、人間そのものが潑はっらっ漑とした生命を
何となく欠いているのじやないかと疑われる。作者の傍
観的態度に原因するのではあろうか。人生よりも芸術を主

とする作家の作品に、我々がややもすると物足りない思
いをすると同様の物足りなさを『寢園』において、私は
感じたのであろうか。作者は人間心理洞察の目は傑れて
いるにしても、この題材になった社会を熟知していない
ので、そういう社会の光景がいきいきと描出されなかつ
たためであらうか。梶の破産の苦悩は無論のこと、奈奈
江が刑事上の罪人となりそうな時の苦悩でも、痛切でな
く、むしろ空々しい印象を私は受けたが、これは、作者
が意識してそういう書き方をしたので、物狂わしいよう
な苦悶や激情を露わに書くのは、作者の好みにかなわな

かったのであろうか。

この作家は、人間の弱点をも見る目を備えているに
らず、概してどの人物に対しても好意を有っている。冷
酷な作家ではない。辛辣な作家ではない。それとともに、
情熱の作家でもない。人生態度が微温的である。

私は、横光氏の処女作以来今日に達するまでの作品を
ろくに読んでいないので、どういう径路を取って自己の
芸術の完成に向って進んだのか知らないのだが、『寢園』
は、形の点ではよく調った小説としての完成品であると
思う。完成品過ぎるくらいの完成品である。ここまで達

した修養は容易であるまいと察せられる。しかし、こういう形が完成すると、形を破って進んで行くのが容易ではないと思われる。完成美はいいがそれで小さく固まってしまうのは、どの方面の芸術家についてもつねに憂うべきことなのだ。

さつき、私は、『寢園』の作者の人生態度を微温的だといった。小説家としての芥川龍之介は、史上のさまざままな人物や事件に対して特異の鋭利な心理研究を試みて我々を喜ばせていたのであったが、晩年、『玄鶴山房』とか、『河童の何』とか『阿呆の一生』とかいったよう

な作品において、自己に対しての鋭利な心理討究の目を向けるに及んで、遂に自分の生命を亡ぼすに至った。葛西善蔵などは物質的に突き詰めた生活をしていて、作品においても自己の実生活を直写していたのであったが、彼れの心理討究なんか常識的で大まかであった。ちつとも恐しくもない、凄くもない。夏目漱石は学究視されていたが、『心』や『行人』に現れたところによると、彼れの自己心理追究は彼自身を悩ましていたのではあるまいかと私には疑われる。横光氏も他人の心理を見詰めている眼を自己の上に転じだすと、とても『寢園』程度で

は済まないだろうと案ぜられる。無論『寢園』には作家の体験に拠ったところがあるのであるのだが、それらは断片的でもあるし、悠長に鑑賞している程度である。サロンのお話である。

私は、林房雄氏の『青年』を快く読んだが、これを『寢園』に比べると、どちらにも新味があるにしても、その新味の感じは著しく異っている。『青年』はぶっつけに書かれたような小説で、すらすらと筆が運んでいて、読者も読み易い。作者の目のつけ所も露わに示されていて、人物の解釈も単純である。こういう態度の文学はややも

すると浅薄に墮する恐れがあるが、作者の手腕に弛みになかったら、テキパキした明快な感じを読者に与うるものである。『寢園』のような態度の文学は世相人事の底へくぐって行くようなものだが、ややもすると萎げた生氣のないものを、一しよ懸命に苦勞して作り出すようになりがちである。

ここで、私はベルグソンの哲学を思い出した。この哲学者の所論は、現代の心理学研究者にも、現代最新派の小説家にも強い影響を与えているそうである。ベルグソンは、「潜在意識の討究」「精神の底へ底へともぐり込

んで人間の正体を突留めること」を主唱するとともに、「萎縮停滞を憎んで、自由にのびのびと自己の生命を伸長させること」を重要視しているらしく思われるのであるが、私には、この相異なつた二つの教えを心に保持して互いに背くところなく、吾人の生活が続けることは容易たやすくないだろうと危まれる。芸術の創作においてもこの二つの態度を徹底的に守って行くことは、甚だ困難でありそうに思われる。精神（すなわち意識）の底深く討究し続けることによつて、必ずしも豊かな希望、さんらんとする光明が発見されるとは限らない。精神の洞奥は、

天国の光に満ちているとはいえまい。地獄の影を濃厚に映しているかも知れない。もし、ダンテが見たような地獄の姿を精神の底に見続けながら、少しも屈するところなく、自由にのびのびと、ベルグソンのいう歓喜の声を揚げて、自己の生命を強く発展させることは、常人の敢えてなし得ることでない、私には思われるのだ。例証として挙げるには、品物が貧弱であるが、『寝園』にくらか現れているように、心理の底を搜索し、潜在意識の底までも鋭利な凝視の目を向けだしたら、自由にほがらかに筆を運んでいられなくなるかも知れない。『青年』

のような作品に明快な趣があるのは、表面的思想、表面的心の動きだけを捉えて、それに安んじ、潜在意識なんか面倒くさいものに思いを及ぼさなかったためではなからうか。猪を打ったのは猪を打ったので、猪を打つつもりで夫を打ったのは、猪を打つつもりで夫を打ったので、そういう点で、止め度なき疑問を、『寢園』風に起さなかったため、誰れにでも分るように明快に事が運んでいるのではあるまいか。

世界文学史上に新しい領地を拓いたといわれる『ユリシーズ』なんかには、意識の表面を描いた在来の写実主

義文学とちがって、前人未踏の精神の洞窟を観破しながら、勢いよく生命の踊躍を覚えているのであろうか。私にはまだ分らない。新しい哲学の創設は天才の傑れた頭脳に基づくのであるが、その哲理に刺戟されて新しい芸術が産み出されるのは、一層困難なことで、非凡な天才に俟^またなければならぬのである。ジイドとかヴァレリイとか、ジョイスとかは、ベルグソンが哲学において為した如くに、文学において新生命を把握したのだそうだが、こういう人々も、理論以外に、純芸術としては、どれほどに完成したものをを出しているのであろうか。直接ある

いは間接に西洋の感化を受け続けて来た日本の文壇に、まだ意識の表面を描いた写実文学すら充分の効果を示していない日本の文壇に、西洋新興の文学がどの程度の影響を及ぼして、どの程度の新しいものを産み出させるのであろうか。

私は横光氏について知るところが極めて少ない。『寢園』をも愛読したとはいえない。しかし、この一篇には、うまいとかまずいとか、面白いとか面白くないとかいう、通り一片の批評で片付けられる以外の、特異の創作家的素質は感ぜられる。その素質が豊かに伸びるか、このまま

萎縮するか予想はされないが、……あるいは、明治以来の数多の文学をして光を薄らがしめるほどの作品が、この作家の頭から創り出されるかも知れないと、私に思わせるものが、この『寢園』には何となくほのめいている。ベルグソンいわく、

「わが構想を實現した芸術家、発見あるいは発明した学者の精励するのは榮譽の為であつて、その惹起じやつきする賞讃か彼らに最も強い歡喜を与えるのだと説く者がある。何たる誤りであろうか。人が名譽と讚辞とに執着する強さは、成功したという自信の弱さを示す正確な尺度であ

る。……他の賛成を求めるのは、自からの不安を蔽おおうがためであり、わが製作の恐らくは不十分な生気を支持するため、これを諸人の熱い賞讃の裡に包もうとすること、あたかも早産の嬰兒を綿のうちに置く如くするのである。しかし、自信のある人物、一の生きたかつ生き続き得る作品を産んだという絶対的の自信を持つ者は、讃辞を不用とし、榮譽を超越する。それは彼が創造者であり、自から創造者であることを知っているからである。そして、これによって彼の体験する歡喜が神聖な歡喜だからである。」（小林市太郎氏の訳文より）

私は、横光氏のような新代の作家とともに、哲人のこ
ういう言葉を熟考したいと思う。

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館